

人間忽々營衆務不覺年令日夜去
如燈風中滅難期忙々六道無定趣
未得解脫出苦海之何安然不驚懼
各聞強健有力時自策自勵求常住

戒淨謹書

善導大師「日没無常ノ偈」
往生礼讃

紙本墨書 縦八二・〇／横三三・〇cm
仙台 大徳寺藏 (以下法量はcm)

結句はよく上人染筆されているが、偈文全体は珍しい。雄渾の筆致は世尊入涅槃に際しての「やよ、比丘達よ、汝らに告げん。諸行は壊法である。放逸なる事なくして精進せよ」の遺誠が偲ばれる。

佛性眞我譬如金剛不可毀壞

戒律書

仏性眞我譬如金剛不可毀壞

紙本墨書 縦一一・二・〇／横三一・三

芦屋 光明会本部聖堂蔵

上人が「眞実の自己」のお話の時、先ず引用された経文（「大涅槃經」八）である。私共は小我の力で運筆するの他はないが、上人は大我を小我なる現象我に顕現するを得た達人であつたことがこの墨跡を拝して痛感される。

能礼所礼性空寂感應
道交難思議故我頂礼
無上尊

昭和庚午五月鳥栖光明會館初時王昧書

戒淨

弁采聖者御垂示

紙本墨書 縦六四・五／横三一・七
鳥栖 橋本起久代刀自藏

これはすでに見仏無生しておられた橋本
きん刀自に与えられた上人の慈悲洞徹の
み教えである。(「光明」六〇七号参照)



念仏三昧為宗

紙本墨書 縦三三・五／横一四三・〇
京都 恒村麗子刀自藏

昭和五、六年頃、上人指導の別時會が洛北高雄の修道院であつた時、恒村夏山先生が上人に「念仏三昧為宗」と書いて頂き、修道院の扁額にしたいとお願ひされた。これはそれに應じて上人が書いて下さつたものであるが、上人は終りの「宗」から書き始められたので、先生の奥様は上人が書き損じられたのかと吃驚されたというエピソードがある。

出典は善導大師「觀經疏」の玄義分「(前略)以念仏三昧為宗。一心廻願往生淨土為體」(「淨全」二卷三頁)。宗の趣く所は往生に在る

が故に、能趣は念仏三昧、所趣は往生である。故に弁榮聖者はよく「念仏三昧為宗、往生淨土為趣」ともおっしゃっている。「お慈悲のたより」下五二等参照)

上人はよく「念仏三昧の大目的を達せさせて頂きました時、親様の慈悲の聖容を見奉ることが出来ます。その時の心全体はお淨土であります。そしてお遇い下さいました人格的如来様は、その時の心の中の中心であり、たましいであります「體と為す」の體とは全体という意味であります」とおっしゃった。また時としては「如来様の慈悲の聖容を見奉っている、その時の體、即ち實質内容は往生淨土である、というのである」ともおっしゃった。(全集下巻五九九頁参照)

自性は十方法界を包めし其の中心小
 微隠し給ふ聖的人格の威神と慈愛と
 を仰ぐあり。真空に徧せし妙有に執せざ
 中道に在りて圓かに照す智慧の光と慧
 愛の熱と有りて。真善微妙の聖天地の
 神を極まし遊ばまはる大乗佛陀釋迦の
 王時にして、又た我が宗祖入神の處なりとす。

上六明浄聖者御垂示

奉 戒浄書

弁米聖者御垂示（「宗祖の皮髄」
 聖堂版八一頁）

紙本墨書 縦一一・二・〇／横三四・〇
 太田 受楽寺藏

昭和八年、群馬県太田市受楽寺住職加藤浄雲師が
 洛北高雄の光明修道院で専心修行の折書いて頂か
 れた。「かかる内容を具備し得た悟りこそ、仏教
 乃至光明主義の理想とする三昧である」と示され
 たもの。（全集上巻五八一頁等参照）

念佛者乃心本
專波六十万十万
億興行之堂

右 弁榮聖者墨書

不第 戒淨筆

弁榮聖者御道詠

絹本墨書 縦六四・〇／横四二・〇

桐生 石田義信氏藏

弁榮聖者は明治十五年二十四歳の時、折柄の土用休みを利用して二か月間筑波山に入山修行され、仏眼をもって靈応身をしっかりと御勧請されたが、これはその折の御道詠である。

彌陀身心遍法界衆生念佛
佛還念一心專念能所已
果滿覺王獨了々

右 辨榮聖者垂示

末第戒淨拜書



弁榮聖者三昧発得偈

絹本墨書 縦六三・二／横三八・八

千葉 後藤謙三氏蔵

やはり上記の筑波山において念仏三昧を成就遊ばした時の偈である。

(全集中巻五五七頁参照)

नमोऽमितायुषे बुद्धाय
नमोऽमिताभाय बुद्धाय

戒淨

namo' mitāyuse buddhāya 南無無量壽仏

namo' mitābhāya buddhāya 南無無量光仏

紙本墨書 縦三〇・三／横七七・三

高石 能見美代子氏蔵

上人がデーヴァ・ナーガリー文字でお書きになった同種の染筆が沢山

戒淨書
見仏三昧

見仏三昧

紙本墨書 縦二七・八／横六二・六

芦屋 光明会本部聖堂蔵

信州松本市の野田実氏が唐沢山で書いて頂かれたもの。二十年前の
同家建替えで行方不明のところ、六十一年正月に発見、同令息野田
秀采氏より今回の上人伝出版に際し、聖堂に寄贈されたものである。